

中欧研修に参加して

国際人文学部国際交流学科
石川 裕太

はじめに

私は今回中欧研修に参加して中欧の歴史や文化などについて非常に多くのことを学ぶことが出来た。私は今回の研修に参加する以前からポーランド語を学習しており、ポーランドについては多少知識はあったが、研修を通してポーランド以外の中欧地域の歴史や文化など様々なことを学ぶことができ、個人的に興味のあった中欧とユダヤ人の歴史についても学習することができたため非常に有意義な研修になったと感じる。歴史についてもただ話を聞くだけでなく実際にその地へ行くことによって実際にその場で重要な歴史があったのだと感じた。今回のレポートでは訪れた4ヶ国のうちハンガリーに焦点を置き、暮らしや特徴、また現地で学んだ歴史などをこのレポートにまとめる。

ハンガリーについて

ハンガリーはV4四カ国の中では非常に栄えており、特に首都のブダペストは観光地としても有名である。プラハやブラチスラヴァと比べると非常に大都市であることがよくわかり、街の雰囲気は他の中欧都市と比べるとあまりヨーロッパらしい景観というのではない。市内にはドナウ川が流れており、その川を挟みブダ側とペスト側で別れておりまた、人口は他の中欧都市同様に首都に集中的に集まっている。物価は日本やウィーンと比べると非常に安く、特に日本基準で考えるとどれも信じられないような値段をしていることが多かった。

生活面

これは他のどの中欧地域でも感じたことだが、スーパーなどで買い物をすると大抵袋がついてこない印象を受けた。日本と比較した際に、エコバッグの利用やプラスチック製品についての考え方は日本より進んでいるという印象を受けた。多くのお店では袋が必要かどうかさえ聞かれず会計が済んだ商品をただ置かれるだけであった。またお土産屋なども基本的には袋がなく、頼まれた場合のみ有料の袋をつけるようになっており基本的には自分で袋を持参するかそのまま商品を持ち歩くかのどちらかとなっていた。普段日本での接客に慣れていると店員の対応が雑で無愛想などと思うかもしれないが、挨拶やお礼などを言えば笑顔で返してくれる事もあるため決して愛想が悪いわけではなく、袋をつけるか否かに関しては日本のサービスが過剰すぎるのかもしれないと感じた。私が思うに一品でも袋に入れる国は日本くらいであろう。

食事面

食事面においては主に芋が出てくるのは中欧地域の特徴だと思うが、ハンガリーでは私が他に訪れた中欧地域と比べて種類が豊富なように感じる。スープで言えば代表的なスープであるグヤーシュスープやその他にもいくつかスープがあり、またオーストリアなどでも有名なパラチンタもいくつか種類がありそれぞれ非常に工夫されているという印象を受けた。お酒に関しても様々な種類があり、ワインをはじめとしてフルーツブランデーであるパリンカ、日本でいうところの養命酒に近いウニクムなどお酒の種類も非常に豊富である。ワインに関してはトカイ地方で生産されるトカイワインが非常に有名で、ハンガリーのおすすめのお土産ともされている。トカイワイン以外の普通のワインにしても日本で販売されているワインと異なり、日本のものより飲みやすいように私個人的には感じた。パリンカは味の種類が非常に豊富でプラムやアプリコット、りんごやチェリーなど様々な味付けがありフルーティーなお酒のため女性でも楽しめるであろう。しかし度数が40度近くと高くまた、飲み方も基本的にはショットで一気に飲むためあまり日本人好みのお酒ではないかもしれない。ウニクムは街中を散策しているとスーパーマーケットのようなお店にはごく普通に置かれているため特段珍しいお酒というわけではないようだ。

歴史

ハンガリーは他の中欧諸国とはやや事情が異なり第二次世界大戦序盤には国として独立した状態でナチスドイツ側の枢軸国についていた。中欧諸国ではナチスドイツに直接支配されていたチェコやスロヴァキアとは異なり、また連合側のポーランドとも違う立ち位置であったと言える。その後ハンガリーは連合国側に移ろうとしたがナチスドイツにより阻止され、ソビエトによって解放されるまではナチスドイツの支配下に置かれていた。大戦後はソビエトの衛星国として東側諸国に属していたが、1956年に民主化を求めるハンガリー動乱を起こした。結果として動乱はソビエトによって鎮圧されたが、その後の東側諸国の民主化へ向けた動きの発端になったであろう。

ハンガリーとユダヤ史

中欧諸国とユダヤ人は昔から深い関わりを持っており、ハンガリーもまたそのうちの一国である。19世紀中盤のハンガリーでは母語であるハンガリー語を話せる人が半数も満たしていなかったため、知識や教養のある移民を呼ぶことでハンガリー語話者を増やそうと考えたのであった。そこで当時のハンガリー政府は当時ロシアにて差別や迫害を受けていたユダヤ人に目をつけた。ユダヤ人は様々な国家を転々としており、その地で暮らしていくための知恵も持っており、勉学などでも非常に優秀な民族と言われている。18世紀ユダヤ人はロシアにて大規模な迫害や虐殺であるポグロムを受けており、非常に苦勞していた。ハンガリー政府は当時迫害を受けていたユダヤ人にハンガリー語を話し教えてくれるなら市民権を与え普通に暮らすことができると声をかけたのである。第一次世界大戦が終了するまではハンガリーの経済に貢献していたということもあり大きな問題はなかったのだが大戦が終了しハンガリー・オーストリア帝国が崩壊しハンガリーの領土が大きく減った際に移民排除の動き

が活性化し、そこからハンガリー内での反ユダヤ主義が出てくることとなった。第二次世界大戦期前半は反ユダヤ主義は活発化されどホロコーストまでは行われていなかったが、44年に戦況の厳しくなってきたナチスドイツが連合国側とコンタクトを取っていたハンガリーを占領したことによって状況は一変する。44年2月からハンガリー国内でもホロコーストが始まりユダヤ人はアウシュヴィッツ等の収容所に送られることとなった。またドナウ川のほとりにてオーストリアへ向かうユダヤ人が全員靴を脱がされ射殺された悲劇等もあり戦後ハンガリー国内のユダヤ人は戦前から比べ半数がいなくなるほどの大量虐殺をうけた。当時のハンガリー国内におけるユダヤ人人口はポーランドに次いで2番目の多さだったため相当の人数が犠牲になったのは想像に難くない。ハンガリーにはヨーロッパ最大級の規模のユダヤ教徒の礼拝所であるシナゴグがありそこにあった墓標のようなものをよく確認すると没年が全て44年と45年となっていた。これは恐らくハンガリーでのホロコーストによる犠牲者であろう。実際にこのヨーロッパの地でそういったことがあったと改めて実感し言葉も出ないような気持ちを感じた。

シナゴグ

ハンガリーには旧ゲットー地区に3つのシナゴグがあり、そのうちの一つであるドハーニ街シナゴグは世界3番目でまたヨーロッパ内では最大規模のシナゴグである。そのためか入場料も安いとは言えない金額であり、内部はユダヤ人が礼拝に使用していた銀皿などが展示されている博物館と隣接しており、それもあつての料金のように感じる。教会内の装飾は非常に豪華で煌びやかな装飾が施されており、壮大さを感じた。中庭のような場所には第二次世界大戦中にホロコーストにより犠牲になったユダヤ人の墓があり、没年は全て44年から45年となっており実際に多くのユダヤ人が理不尽な虐殺を受けたということを改めて確認することができた。中庭をさらに進んでいくとホロコースト記念碑と当時ユダヤ人が隔離されていた建物があった。中心には生命の木と呼ばれる柳の木をモチーフとした鉄の木があり、鉄で出来た葉にはホロコースト犠牲者一人一人の名前が刻まれており相当数の葉があった。アウシュヴィッツとはまた違った意味で残酷さや恐怖を感じた。博物館内は銀皿等の展示が主であったが、中には礼拝に必要な聖書のようなものなども展示されており、文化的なものや生活面での展示品が多いように感じた。また一角にはホロコーストについての展示もあり、アウシュヴィッツのあとその話がタブーとされていたということなども書かれており、忘れてはならないことだと伝えられているようであった。

終わりに

1番最初の場面でも述べたが、私は今回中欧研修に参加して非常に多くのことを学ぶことができた。ポーランド語を履修し、ポーランド研修に参加しアウシュヴィッツを訪れ、実際に自分の目でホロコーストについて多少学んだつもりではあった。しかし他の地域へ行くことによってアウシュヴィッツ、ビルケナウで学んだ事からさらに知識や当時の歴史、背景について学ぶことができた。アウシュヴィッツはいわばホロコーストの終点であり、その途中について学んだことにより今までの自分が知ってきたことは一部に過ぎないということを強く

感じた。今回の研修に参加したことにより、自身の研究していきたいとテーマを見つけるきっかけともなり、非常に有意義な研修になったと感じる。そしてそれとともに様々な面で自身が成長できたように思える研修であった。

参考文献

<https://www.jasnaoe.or.jp/k-senior/old/DOC/judea/risan.html>

<https://ippin.gnavi.co.jp/article-4231/>

<https://www.euroasia-trd.jp/palinca.html>